C—51　ＩＢＰ衣服調査に基づく衣服の保温力の研究（第１報）

信州大教育　○関川信子　奈良女大家政　水梨サワ子

目的　ＩＢＰ衣服調査に基づく衣服の保温力の研究として、家政学会被服構成学の第３部門１員として、共同研究による調査を1971年１・４・７・10月実施した。その調査による衣服の（衣服重量／体表面積）から算出した保温力と、着用実験結果のclo値との関連から、体温調節上の適否を確かめることを目的に本実験を行った。

第１報は主として平均皮膚温の季節別変化，第２報は保温力（衣服重量／体表面積）とclo値について検討した。

方法　実験の実施期間は1972年４・７・10月、1973年１月（春・夏・秋・冬）年４回，人工気候室において、26±１，21±１，16±１℃の環境条件のもとで、成人女子２名について、ＩＢＰ調査の実態調査結果から、各季節の標準着衣を見出し、その着衣による椅座安静１時間の皮膚表面温，衣服表面温について測定した。

結果　安静時１時間における平均皮膚温は、２名の被験者いづれも26±１℃と21±１℃の平均皮膚温間には、10％の危険率で有意な差がみられたが、５％の危険率では有意性は認められなかった。また21±１℃と16±１℃の平均皮膚温間は、２％の危険率で有意な差がみられたが、１％の危険率では有意性は認められなかった。

以上、今回実験の平均皮膚温から、標準着衣は体温調節の観点から、ほぼ良好と認められる。